

# 創造における言語・身体・記憶への断章 ——未完の記譜／別様の行為を誘発する装置

高橋 悟 (京都市立芸術大学大学院構想設計・メディアアート領域教授)  
Satoru TAKAHASHI



1958年、京都生まれ。1988年、イェール大学大学院美術修士課程修了後、アート制作のかたわらNHKニューヨーク支部に勤務。1997年～2001年、カーネギーメロン大学美術学部客員助教、2001年～2008年、ミシガン大学美術学部准教授。2008年帰国、現在は京都市立芸術大学美術学部構想設計・メディアアート領域教授を務めながら、アーティストとして活動している。代表作にLto R/Double Douchなど。

## 『門』

S (宗助)「近来の近の字はどう書いたっけね」

Y (御米)「近江のおうの字じゃなくて」

S「その近江のおうの字がわからないんだ」

Y「こうでしょう」

S「やっぱりそうか」

Y「本当に良いお天気だわね」

S「どうも字というものは不思議だよ」

Y「なぜ」

S「なぜって、いくら容易い字でも、こりゃ変だと思って疑り出すと分からなくなる。この間も今日の今の字で大変迷った。紙の上へちゃんと書いて見て、じっと眺めていると、なんだか違ったような気がする。しま

いには見れば見るほど今らしくなくなってくる。——お前そんな事を経験した事はないかい」

Y「まさか」

S「おれだけかな」

小説『門』の冒頭部分、縁側に横になり思いにふける宗助と裁縫をしている御米との会話で、夏目漱石は文字から意味が剥落し、見知らぬ物として視界に浮上する感覚について記述している。文字を構成する要素の結び付きがゆるみ、統合され形を持ったイメージが解体する感覚。文字だけでなく、ヒトの顔、見馴れたはずの物や風景の見えかたが、ふいに異なった相貌をおびる背景には、人間の知覚・感情と行動の回路の解離があるように思われる。小説の中で、宗助は、過酷な過去の記憶により、社会との行動の回路を絶たれた傍観者として位置付けられている。知覚が、もはや、「行動への回路」へと結び付けられなくなったとき、「別

様な知覚」、いままでは、見えてこなかった世界が、降りかかってくる。

## 未完の記譜

一般に、記譜法とは、楽譜、舞踊譜、図面など、行為の記録と再生の指示を行うものとされる。しかし、厳密なスコアを有したものでなく、広く、運動を起こす流動的な装置として、記譜を捉え直すならば、道具、公園、遊具、建築物、庭、そして芸術作品それ自身も、創造的な行為を誘発する「未完の記譜」と考える。これは、ひろく日常的な反応・動作を喚起する装置という意味ではなく、現実的な行為、運動図式がいったん宙づりにされる状況、見馴れた物・事が多様なフルマイの可能性へと開かれる事態をさす。小説や音楽の楽譜に代表されるように、記譜を書く主体と、それを読み・再生する主体は、2つの異なった位相、時間軸に属する。2つの異なった経験



図1 作品 Dumping Sight / Land Scope 1994年 ニューヨーク州立大学美術館

を同時に引き受けるとどうなるか。そもそも可能なことであるのか。創造的経験における、過剰な感覚・記憶・解釈の中では、ヒトの知覚・感情と行動の回路が解離し、行動を支える地平と身体感覚が分離する中で、あたかも「他者のごとく」自身の行動が引き起こされる。「未完の記譜」への考察は、従来の個人・表現・受容者を最小単位の前提とした芸術論、ならびに、美術・音楽・文学・建築などジャンル論とは異なったモデルによる制作・研究へと我々を導く可能性がある。

## アーカイブと美術館

第2次世界大戦中にナチスの侵攻を受けつつあったソビエト・エルミタージュ美術館では、貴重なコレクションを破壊と略奪から守るために、密かに収蔵品の移動を行っていた。膨大なコレクションを分類・梱包して運び出した後に美術館に残されたもの、それは観るべき対象を取り去られたむき出しの壁、それぞれの場所に作品が掛けられていたという人々の記憶のみ。この美術館はコレクションがなくなった後も閉館せず、館内ツアーというものを続けていた。一人の学芸員がそれぞれの作品が掛けられていた壁の前で立ち止まり、詳細な解説を続けていく中で、言葉と記憶からなる想像の美術館の中へ鑑賞者たちは入っていくようになる。ここでは、美術館はある空間・場所、あるいはトポスにイメージを関係づける手法、想像の共同体としての国家・国民や、集合記憶に基づく物語と場所の形成に関わる「記憶術」としての美術館というモデルに関わっている。

## 記憶術

ロシアの神経科学者ルリヤは、シーと呼ばれる1人の記憶術者を被験者とした30年にわたる研究の手記

を残している。ルリヤは、シーの驚くべき記憶力に関して、言葉や数字に色、音、イメージが結びつく共感覚について述べている。また、複雑な内容を記憶する場合は、古来の記憶術のように、見知った街路に記憶すべき項目を順次配置しておき、必要な時は、その中を歩きまわることによって自由に取り出すという方法をとっていた。しかし、シーの場合、常に、記憶・感性・想像力が現実の知覚を凌駕させる過剰なものが背後にある。「私が再認するのは、単に像によるのではなく、その像によって生じる全体的な感覚の複合によっています。語は、ひとりでの思い出されるのです。私は、手に、何か油のようなものが滑っていくことを感じ、その全体の中から、微細な点、しかも非常に軽い点が、左手を軽くくすぐります」。さらに、彼は、想像を介して身体の過程、脈拍や体温を変化させることもできた。

一般に、我々は、外界に対応した創造的な行為を生み出すイメージ作用については理解しているが、過剰な記憶と感受性を持ったシーの場合は、イメージの活動が外界に向けられずに、行為を代行し、現実的な行動を不要のものとしてしまう。そのため、彼は社会の現実の場では、適正な行動をとることに困難を生じ、仕事を転々とし、最後には記憶術師となったのだが、自己の人生において、「ここではない別のどこかの場所」に所属した、「傍観者」と感じていた。

## アルツハイマー

ベルクソンは、「物質と記憶」で、自分の住んでいた町の中を想起して歩きまわることができるにもかかわらず、実際の場所

にゆくと、初めて訪れた場所のように迷ってしまう患者について語っている。この場合、現実の知覚と記憶を関係づけることに障害があると考えられる。認知症の場合には、これとは少し様相が異なり、病院など新しい環境では方向を失い徘徊状態になる人が、住み慣れた家に戻ると、別人のように自由に行動し、料理をすることまで可能となった事例も紹介されている。ここでは、住み慣れた環境自身が、行動を誘発する情報として身体に組み込まれているのではないか。図2は、グループホームで療養されている認知症の男性Kさんに、かつて住んでいた自宅の見取り図を描いていただいたもので、震える手で、何度も描きなおして書かれたものである。

図3は、Kさんに描いていただいた自宅周辺の地図。近隣の数件の家とバス道以外の部分は、空白の場として残されたままである。同様の地図を認知症の女性の方に描いていただいたが、そこには、近隣の住民の氏名に加え、八百屋、パン屋、薬屋、パーマ屋など生活に関わる情報がびっしりと書き込まれていた。

運動図式と記憶に関わる制作・研究の一環として、筆者は、2002年より、ミシガン大学で、医学部と共同で研究・制作をつづけていたが、以下の3つの点に興味をもった。第1に、認知症患者の多くが、近い過去の記憶を想起できないにもかかわらず

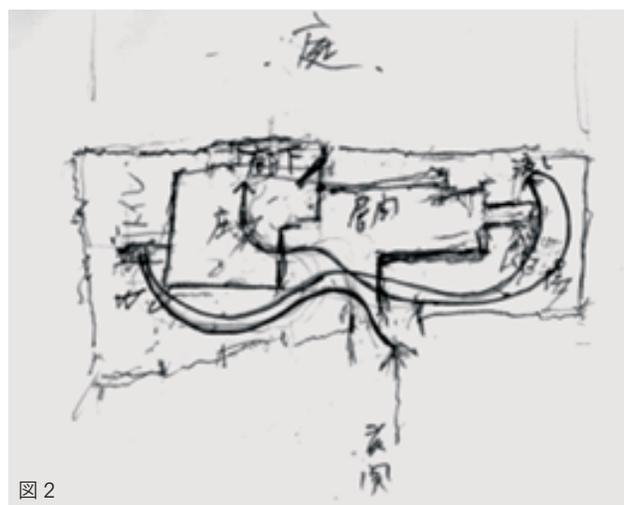


図2

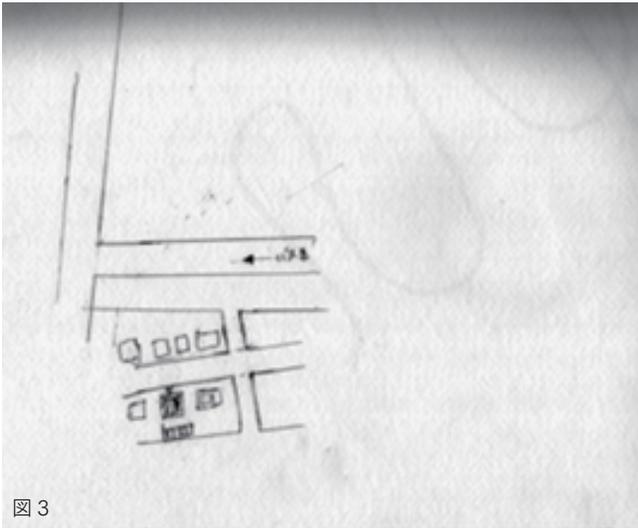


図3

## 仮構機能

微小重力下の宇宙船内では、前庭情報や体性情報が欠けており、そのため、「手がかり」となる床・自己の身体が絶えず相対化されることにな

ず、幼いころの記憶を呼び戻すことができること。第2に、記憶に重大な困難が出てくる前段階として、道に迷うなど、空間把握に問題が出てくること。第3に、道具・楽器などの特定の動作や、住み慣れた環境などが、特定の情動を伴う記憶を呼び覚ますこと。これら3点の関係から、行為・運動を誘発することで、特定の情動を伴った記憶を引き出す装置の可能性をさぐった。

り、空間知覚に葛藤が生じる。逆に、例えば、ドアの取っ手、壁面の突起など、仮の手がかりが、とりあえずの「参照軸：レファレンス軸」して成立した瞬間に、そこを起点に空間が構造化されるという報告もされている。このような空間知覚の形成は、志向性・意識を前提とした「自己一定位反応」という言葉で説明される。しかし、私見では、経験における動的なプロセスや、創

造性に関わる受動的で偏在的な経験を捉えるには不十分である。ベルクソンは、底のないエレベーターに自動的に乗ろうとした人物が、背後から見知らぬ他者に捕まれ一命を取り留めた事態について「仮構機能」という語を当てている。「背後の他者」は、現実に存在した人物ではなく、事態を察知した瞬間に作り上げられた架空の人物である。文学の世界だけでなく、知覚・感覚の世界にも同様に生じる「仮構機能」は、創造のプロセスにおける1つの原動力と考え得る。美術家の岡崎乾二郎氏は「1つの文章を書くには、まずその文を統御するところの主語を立ち上げなければならない。この主語は、つねに仮設物であり、創造的にとりあえず、文の中に立ち上げられるものである。運動をするためにも、同様に、この主語としてのイメージを立ち上げなければならない、個別の動作を連続した動作へと統御してゆくものは、このイメージである」と述べている。



図4 作品 Trans-Acting/二重軸回転装置 2010年 京都国立近代美術館

## ダンス・ステップ

健常者を対象として、自分の住んでいた家を想起し、その中を歩きまわる経路図を作成していただいた(図4参照)。経路の描きかたはそれぞれ異なり、描いた本人以外からは、読み取ることができない手がかりが、描かれている。これらの経路図を回転し、直径8mの揺れる回転ステージの上に大きく投射し、辿りながら歩くという実験作業を行って見た。ここでは、現実知覚による身体行為と想像イメージとの重ね合わせとの調停が行われ、「覚醒した時間」と「自己へ没入した時間」という2つの異なった時間軸に身を置くことが生じる。

## 分解写真

「ドガ・ダンスデッサン」の中で、ポール・ヴァレリーは、エドワード・マイブリッジの分解写真について述

べている。知覚の再組織化と分散に関わるそれらの写真は、人間の眼、知覚というものが、生のままの非連続的な与件を修正し、子供のころから習得した判断を導入して時間・空間・運動という名前でもまとめている変形様式に捉えられているという事実、逆にいうと、知覚を時間・空間という安定した座標から引き剥がされたもの、志向性をもった知覚・自己というストーリーをこえでるものとして理解させることになる。

体性感覚・前庭感覚と視覚情報との間に葛藤を引き起こすものとして2軸で波打つようにゆれながら回転するステージを作成した。重量に抵抗する形で、動作を組み立てる運動図式を身体にたたき込んでいるバレエダンサーは、外見からは、身体・重心のブレとの葛藤による分散した動きを見て取ることはできなかった。しかし、実験撮影のあとの円盤上には、無数の傷、足の動きの痕跡が、切れ切れの直線や、同心円がずれながら動く曲線として、ドローイング

のように、あるいは、舞踊譜のように、残されていた(図5参照)。

## 歩行視—— Now Here /No Where

緩やかに変化する歩行のリズムに、身体をあずけながら風景を歩いている時、ふっと細部に一瞬、眼が奪われ、空白の時間を感じることもある。再び続けられる歩行の中にも、その記憶はどこに残り、別の視点から自己のいた場を眺めると、視線がそちらのほうへと引き寄せられ、身体と視覚の関係が、時間・空間が、不思議な矛盾した状態になり、さらに次なる歩行へと歩み出す

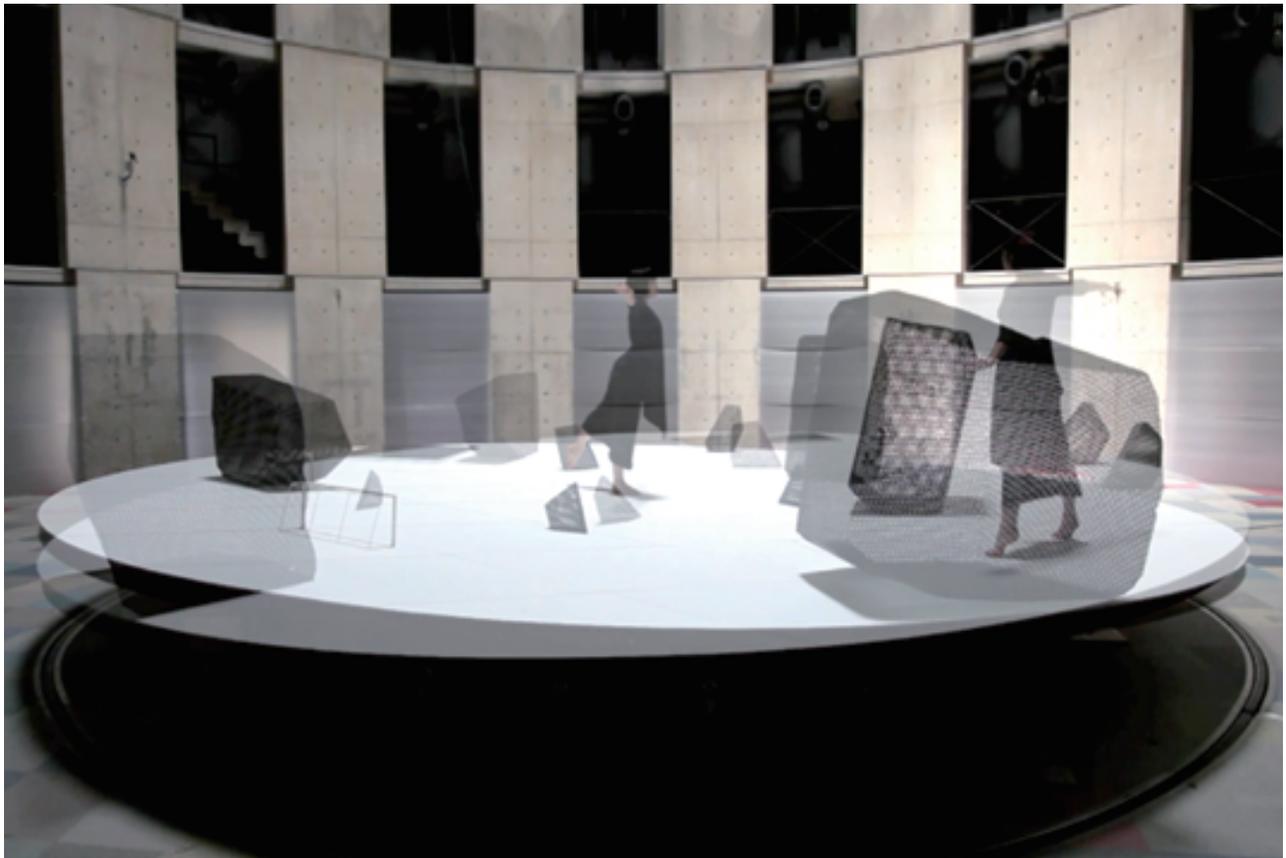
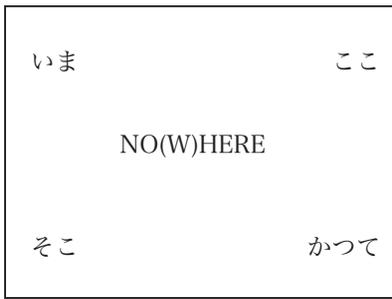


図5 公開実験「未完の記譜法」 2012年 京都市立芸術大学大学会館ホール



ことになる。このような経験についてとりあえず「歩行視」という言葉をあててみる。英語表記の可能性としては、「sight-seeing /site-walking」という言葉が考えられる。sight (視覚)、site (場所)、seeing (視つつある)、walking (歩きつつある) というその4つの組み合わせで構造化され、交差点の中心に歩行視を置いた作図ができる。これを表の面として、裏面には、「いま」「かつて」「そこ」「ここ」という4つの語を配置し、中心に「いまここにあってどこにもない」「now-here」と「no-where」という時空間がトポロジカルに繋がる作図を対応させる。この2つの面の関係から、視覚・身体・歩行・場所・記憶

の特異な関係を表すありようを示すことができる。

1973年9月11日火曜、サンチアゴ(チリ)でアメリカ政府の指導の下に、ピノシェ軍事政権によるクーデターがおきた。これを記憶するため「9月11日通り」という名称の街路が作られた。作品「Now here/No Where: Vale of Paradise」では、2001年9月11日火曜に起こった米国の同時多発テロと関連させるという視点から、メビウスの帯状の構造体と映像を組み合わせ、歴史・記憶・場が、トポロジカルにリンクする経験の創出を試みた(図6参照)。

哲学者のジル・ドゥルーズは、映画論で、災害や戦争など、現実に対応するには、個人の能力を超えた状況の中では、人間は、行動・知覚・感情が解離して、ばらばらになり、まったく新しい未知の時間経験が立ち現れ、純粋な視覚的経験と純粋な聴覚経験が結びつくことなく並行線の状態で流れの中に没入する傍観者とな

ることを述べている。本論考の導入『門』でも述べたように、知覚が、もはや、「行動への回路」へと結び付けられなくなったとき、我々は、現在の行動へと向けられた「知覚」、潜在的な「記憶」という2つの位相の「間」で、いまここにありつつ、どこでもない場所に漂うことになり、そこには、「別様な世界」、いままでは、見えてこなかった世界が、降りかかってくる。冒頭の『門』での宗助の経験にも関わるこのような経験は、ある意味で、我々を予見不能な創造に立ち合わせる事件といえよう。

図7は大阪市中央公会堂の天井画を2軸でゆれながら回転する色鏡にうつしこみ、観客に身体が浮遊する感覚を起こさせる装置。「見下ろす」姿勢からオレンジ色の鏡の反映をとおして「見上げる」ことや、「自己の鏡像」と「ドーム型の天井画の人物」の揺れの相互作用で、視覚と前庭・体性感覚の関係の齟齬と、定位するイメージの形成過程を考察する試みである。



図6 作品「Now here/No Where: Vale of Paradise」 2006年 チリ・サンチアゴ(倉智敬子との共同プロジェクト)



図7 「Now here/No Where-ふろいとといとまき」 2013年 大阪市中央公会堂